

青銅製の鏡が 紡いだ 苦難の歴史

祈りを映す「キリシタン魔鏡」



青銅製の鏡の鏡面(左)と裏の模様面(右)

江戸時代に忽然と出現!

心からの祈りが届いたのだろうか。青銅製の鏡に反射した強い光が投影された壁面に浮かび上がる張りつけにされたキリストの像。なんと、鏡の背面に刻まれたキリスト像が、光の中にくっきりと現れたのである…この不思議が「魔鏡」たる所以である。

魔鏡は、中国で紀元前1世紀頃から作られていたと言われていた。この技術がどのようにしてわが国に根づいたかは不明だが、どうやら、中国から渡ってきた技術をコピーにコピーを重ねていくうちに、どんどん薄くなり、たまたま裏面の像が投影されているのを発見したのではないかとされている。江戸幕府の禁教令のもと、表だったキリスト教信奉が叶わず、いわゆる隠れキリシタンがこの魔鏡を心のよりどころに、秘かに鏡に光を当て、映し出されるキリストに祈りを捧げていたのだろう。教徒は、背面に強固な蓋をかぶせ、ひた隠しにしたという。

魔鏡は型づくりと削りが命

ここは、京都市下京区にある慶応2(1866)年創業の株式会社山本合金製作所。わが国で唯一魔鏡を作ることができる和鏡工房である。

最近5代目のご子息に社長職を譲られた4代目鏡師 山本富士夫氏は言われる。



4代目鏡師 山本 富士夫氏

—まずは、細かい鑄肌、繊細な模様が写しとれる砂と土を混ぜた鑄型を作ります。そこに「へら」を使って模様を入れていきます。微細な模様に対応できるよう初代から受け継ぐ200種もの「へら」を使い分けています。型の完成まで2〜3ヶ月。完成したら型を焼き、ここに溶解した銅合金(青銅)を流し込み



砂と土を固めた型に模様を施す「へら」

ます。30分ほどで固まった銅合金を取り出し、削る作業に入ります。鏡面側をまず「やすり」で一気に削っていき、ある程度になったところで「セン」という金属カンナでさらに薄くしていきます。10mmほどに鑄込まれた素材を1mm以下にまで薄くします。この薄さが「魔鏡」の命、当社の技術の粋なのです。一般的な和鏡の削りは半日程度で終わりますが、魔鏡では1ヶ月もかかります。光の乱反射により背面を映し出すのがこの薄さなのです。さらに砥石と炭で研ぎ、磨き、ニッケルメッキをかければ完成。全工程で半年はかかる作業になります—

150年にわたり培ってきた類い希な技術から生まれた魔鏡は、平成26(2014)年の訪欧の際に、安倍首相からバチカン市国のフランシスコ法王に贈呈されている。



まず「やすり」で大まかに鏡面を削る



「セン」でさらに1mm以下にまで削る



(上)型によって削り上げられた背面のキリスト像

(左)映し出されたキリスト像